

---

 学 会 記 事
 

---

## 第38回新潟救急医学会

日 時 平成11年 7月10日 (土曜日)  
午後 2時より  
会 場 新潟大学医学部 大講堂

## 一 般 演 題

## 1) ヴィーン F 注の製品紹介と輸液剤の歴史

島田えり奈 (日研化学株式会社)  
高崎支店

輸液の歴史は19世紀にヨーロッパでコレラが流行し、その対症療法としてイギリスのラッタが輸液剤を用いたのが始まりだといわれている。その後、機器の発達や世界大戦などを経て輸液剤の組成は現在に至っている。

現在の細胞外液補充液の多くは、アシドーシスの防止を目的とした塩基源として乳酸ナトリウムを用いている。これに対し、ヴィーン F 注は塩基源として代謝が速く、全身で利用代謝される酢酸ナトリウムを用いた新しい細胞外液補充液である。

塩基源としての酢酸の特性と、輸液剤の歴史についてヴィーン F 注の紹介と併せて紹介する。

## 2) 救急出動中の転院搬送の現状

青海 広之 (新潟市西消防署)

## &lt;目的&gt;

転院搬送とは医師の管理下にある傷病者を、他の医療機関へ救急自動車で搬送することである。

消防機関の行う転院搬送の要件として①緊急性があること②要請医療機関に治療能力が無いこと③他に搬送の手段が無い場合の3項目が挙げられているが、現状は医師や看護婦の同乗も無いまま搬送の行われているものも多い。こうした中、他市町村では医師の同乗の無い状態で、患者が搬送中 CPA 状態になる事例が発生するなど、転院搬送について今一度関係者相互で検討すべき時期に来ていると考えられる。このような観点から、新潟市における転院搬送の現状を把握するため調査を行った

ものである。

## &lt;対象&gt;

新潟市は管内人口48万人で、9台 (内兼務隊2隊) の救急車を配備し、平成9.10年の2年間の救急出動件数は22,751件であり、そのうち転院搬送は1986件で全体の8.7%にあたる。

## &lt;結果&gt;

転院理由として診療科目が無いなどの処置の困難がほとんどである。疾患別では脳疾患心疾患の割合が多い。2次医療機関どうしの転院の比率が高いのは病院の住分けが進んでいる事を示す。平日日中の搬送要請が極めて多い。医師同乗率は約26%である。

## &lt;考察&gt;

①高齢者人口の増加、医療の高度化と専門化が進む中、患者カルテの開示やインフォームドコンセント徹底により患者の要求が医療に持ち込まれると、転院搬送は今後も増加するものと考えられる。

②医師等の同乗の割合が低く、休日夜間以外は患者の急変に備え可能な限り同乗することが望ましい。

## 3) 県北の救急医療体制

東	敏明	(岩船地域広域事務組合 消防本部 救急救命士)
清水	春夫	(厚生連村上総合病院 病院長)
小出	章	(同 副院長)
高橋	祥	(同 脳神経外科医長)

県北の救急医療体制について、岩船消防本部管内の消防救急体制と二次医療機関の救急医療体制の経過と現状を紹介する。

脳神経外科の常設により、救急傷病者の管外搬送状況が減少したが、心疾患については治療施設がないことから管外へ搬送せざるを得ない状況であること。

救急傷病者の搬送実態から、人口の過疎、高齢化による疾病構造の変化が読み取られることなどを説明した。

このような中で、平成9年12月から厚生連村上総合病院の協力により、当地においても救急救命士が特定行為を実施できるようになった。さらに現在は指示病院も4病院に増強され、救急救命士も着々と増員されてきており、関係者の努力によって県北地方の救急医療体制が改善され、地域住民が救急医療の恩恵を受けられるようになったことなどを紹介する。